論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第８条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名（姓、名）	イコマ　トモカズ 生駒　智一		授与番号　甲 1373 号
学 位 の 種 類	博士(国際関係学)	授与年月日	2019 年 9 月 25 日
学位授与の要件	本学学位規程第１８条第１項該当者　　[学位規則第４条第１項]		
博士論文の題名	韓国政治における金鍾泌の役割 ―三金時代（1988～2003）の分析―		
審　査　委　員	(主査)　中戸　祐夫 （立命館大学国際関係学部教授）	文　京洙 （立命館大学国際関係学部特任教授）	
	小針　進 （静岡県立大学国際関係学部教授）		

論文内容の要旨

①論文の課題と構成

1987 年の韓国の民主化以後、金泳三（第 14 代大統領）、金大中（第 15 代大統領）、そして金鍾泌（金大中政権期の国務総理）の 3 人の金氏が最高権力者の椅子をめぐって競合した時代を「三金時代」という。このうち金鍾泌とその勢力は弱小でありながら、「永遠のナンバー2」といわれるような高い地位を維持したばかりか、金泳三、金大中の政権獲得を媒介し、韓国政治の民主的発展に貢献した。本論文は、こうした「三金時代」における金鍾泌の役割を「接着剤」というキーワードを手掛かりに明らかにすることを課題としている。

序章では、現代韓国政治における「ナンバー2」とされる有力政治家についての先行研究が検討され、金鍾泌の特殊性や優位性が示されるとともに本論文の課題と構成が示される。第一章では連合政治をめぐる先行研究が各種のモデル別に検討され、「接着剤モデル」の内容が明示される。第二章は金鍾泌の政治家として個性が培われた民主化以前の時代が前史として解明される。第三章ではいわゆる「三党合党」を経て金泳三政権に至る時期、第四章では金大中政権の成立から金大中・金鍾泌連合の瓦解に至る時期が検討される。終章では、第一章から第四章までの内容がまとめられると同時、「接着剤」としての金鍾泌が韓国の政治発展に果たした役割が検証される。

②論文内容の要旨

本論文が対象とする「三金政治」の時代は、盧泰愚・金鍾泌・金泳三・金大中をそれぞれ領袖とする四つの勢力が競合する連合政治の時代であり、**第一章**では、連合政治をめぐる各種のモデル（連合政権理論モデル・２.５政党制モデル・かなめ党モデル・地域連合モデル・接着剤モデル）が批判的に検討され、「接着剤モデル」の内容と金鍾泌分析におけるその適合性が論じられる。**第二章**では三人の金氏の政治家としてのプロフィールとその比較、さらには半世紀にわたる三金の半生を辿りつつ、彼らの間の複雑な人

	間関係と民主化に至るまでの時代背景が述べられる。 第三章、第四章は、主な分析対象となる「三金時代」が扱われるが、分析の対象期間において、連合は２度形成されている。一度目は盧泰愚・金泳三・金鍾泌の３勢力が合流した「三党合同」であり、**第三章**で分析される。「三党合同」に至る盧泰愚政権期は、金鍾泌派、盧泰愚派、金大中派、金泳三派の四派がすべて個別の政党を構えていたため、連合の組み合わせは最も複雑で多様であった。実際、各勢力間で様々な駆け引きがあり、その駆け引きを経て連合が成立する過程が、盧泰愚勢力と金泳三勢力とを媒介した金鍾泌の「接着剤」としての役割を中心に分析される。この連合は金泳三政権でもそのまま引き継がれるが、金泳三政権の後半期に金鍾泌が離脱したことによって、連合は終焉を迎える。**第四章**では、金大中政権期が分析される。金大中政権の成立は金大中と金鍾泌の連合政権として一般にみられているが、ここでは DJT 連合、すなわち、第３の勢力として朴泰俊を加えた３派連合としての側面が強調され、ここでも金鍾泌の「接着剤」としての役割が際立つことになる。この DJT 連合も最終的には金鍾泌の離脱よって瓦解する。 終章では、軍部の政治的影響力を排除し韓国の政治発展に大きな貢献を果たした金泳三・金大中両政権の成立に果たした金鍾泌の「接着剤」としての役割と意義が検証される。同時に、「接着剤」モデルを理論的な枠組みとする比較政治研究の可能性が検討される。
論文審査の結果の要旨	①論文の特徴 本論文の特徴は以下の 3 点に集約される。 １）対象時期の韓国政治の研究については多くの蓄積があるが、軍部を背景とする権威主義勢力や金泳三・金大中など政権獲得をなしたメジャーな勢力分析、もしくは社会運動からのアプローチなどが一般的で、金鍾必に焦点をあてた研究は希少価値が高い。 1988 年の民主化は、その後もしぶとく根を張る権威主義的な秩序や政治文化を清算して、名実ともに民主的な政治体制に向かう長期にわたる移行期の出発点であるというる。本研究は、そうした民主化（政治発展）が安定的かつ顕著にすすんだ 15 年余りの期間に着目して、それぞれの時点で民主化の達成を損なうことなくこれをさらに発展させていくうえで金鍾泌という政治家（政治勢力）がある種の触媒（接着剤）として果たした役割を明らかにしている。 ２）ナンバー2（もしくはナンバー３）として存在した政治家や政治勢力を単なるバイ・プレイヤーとしてではなく、2 つ以上の勢力の競合を前提とした「接着剤」という論理仮説を設定してこの間の政治過程の分析を試みていること。そうした論理仮説を前提に一般に金大中・金鍾泌連合とされていた政治的提携において第 3 の勢力ともいえる朴泰俊派に注目し、その役割を金大中などの回顧録を通して実証している。 ３）大規模勢力が競合する中で少数勢力が「接着剤」としての役割を果たすという論理仮説は、民主化や政治発展という見地からの政治過程の比較分析の枠組みとしてもユニークであり、諸外国・地域の比較政治過程分析でも一定の有効性をもつ可能性がある。 ②論文の評価 審査委員会は、本研究が単なる通史的論述や、先行研究の整理にとどまらず、①のような点で実証研究としても比較政治研究としても独創的な貢献であると評価した。とりわけ、政治社会の構造分化と多元化が極度にすすむ現代世界において多様な政治勢力間の合意形成

	が政治発展の要として提起されつつある中で、「接着剤」としての役割への着眼はユニークであると評価した。 　公聴会でも活発な質疑応答が行われ、その結果、以下の点が本論文の課題として示された。 １）第四章の手堅さに比べ、第三章の三党合同がなぜ２党ではなく３党となったのか、という点の記述が、論理的にも実証面でもやや甘い。金鍾泌の勢力が「接着剤」となったという場合、結果的にそうであったということであろうし、金鍾泌自身は、常に政権獲得を目指し、「接着剤」に甘んじようとしていたわけではない。金鍾必の立場からすれば、４２％の議席比率の盧泰愚勢力との合党だけでも国会の過半数（６０％余り）を制することが可能であり、何よりも有力な次期大統領候補となる金泳三を排除する方が、自身が合党した新党のなかで大統領候補となる可能性が高い。にもかかわらず３党合党となった背景や理由について、政治発展や「接着剤」という理論仮設を踏まえて、実証的にも論理的にも補強することが必要である。 ２）第二章と第三章を通じて、三金を中心とした政治家の回顧録等を根拠に論じている部分が多いが、政治家の回顧録はファクトから離れて「どう見えていたか」といった主観や、「後付け」的な発言もあることを考慮すると、回顧録についての批判的な視点からの検討が不十分であるといわざるをえない。 　　こうした今後の研究課題はあるものの、既存の研究動向に新たな知見を加えた独創性や学術的貢献などを評価し、審査委員会として本論文は本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しいものと判断した。
試験または学力確認の結果の要旨	本論文の公聴会は、2019 年 12 月 25 日（火）12 時より 14 時 30 分まで恒心館 KS302 号教室で行われた。主査および副査は、論文審査および公聴会での質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認した。その上で、審査委員会は、本学学位規程第１８条第１項に該当することを確認し、生駒智一氏に博士（国際関係学　立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断した。